２００８年度　関西学院大学専門職大学院
経営戦略研究科　科目等履修生　小論文

氏　名	森本　好映

以下の五つのうち、一つを選んで２０００字程度で論じなさい(表裏の論文用紙の範囲で記入すること)。なお、選択した論題の番号を明記し、課題の内容を「副題」として設定した上で論じなさい。

経営戦略専攻

１．最近の企業倫理をめぐる課題　　２．最近の経営戦略をめぐる課題

３．最近の経営のグローバル化をめぐる課題

会計専門職専攻

４．最近の会計をめぐる諸問題　　５．最近の自治体行政経営をめぐる諸問題

論題番号	2	副題	データ爆発と企業が保有するデータの有用性

90年代のIT・インターネットの普及に始まり、近年のブロードバンド化、データの大容量化により、天文学的な量のデータが日々生み出され、企業内外に蓄積されていっている。IDC Japanの調査によると、2007年度の国内データセンターの市場規模は約6000億円（前年比14%増）であり、2011年には約1兆1000億と倍増することが確実視されている。データの爆発的な増加により、企業はその維持・管理コストや個人情報漏えいの問題など配慮すべき事項が増え、そのリスクは増すばかりである。果たして、今日の企業がデータを保有するということは、本当に有用なことなのであろうか。

結論を先に述べると、今後の企業にとってデータを保有することは、有用であるばかりでなく、市場で勝ち残っていくための必要条件であると言える。

まず、顧客・マーケティングの視点からみると、顧客データや購買履歴、POSデータ、Webのアクセスログ等は、企業が顧客志向のマーケティング戦略を策定するためには欠かせないものである。顧客ニーズが多様化し、複雑化する市場においては、迅速かつ的確に顧客の声を集め、分析するとともに、仮説を立案し、新たなマーケティング施策を打ち出すことが求められる。この材料となるのが顧客データである。Eメールによる問合せ履歴、コールセンターの通話履歴、市場での購買履歴やアフターサポート履歴などのデータは、いわば「顧客からの通信簿」であり、「組織の血液」であると言える。顧客からのメッセージ（データ）を適切に統合し、組織内で共有し、次の戦略に活かすことで新たな価値を生む土壌ができる。そのためには、きれいな血液（クレンジングされた顧客データ）が欠かせないのである。

次に、生産性向上など内部オペレーションの視点からみても、データは必要不可欠なものであると言える。従来、日本企業は製造業を中心に、E.Deming博士等に始まる品質管理手法、トヨタ生産方式などの改善手法により、多くの成果を挙げており、ものづくりの品質・生産性では競争優位を保って

いる企業が数多くある。しかし、現在のようにグローバル・ソーシングが進み、日本の社会が少子高齢化する中で、その優位性を維持するためには、さらなる生産性の向上が必要である。そのためには、データに基づくPDCAサイクルの実行が欠かせない。仮説を立案し、実行し、その結果を分析して次のアクションへつなげるためには、データに基づく定量的な分析、仮説検証は欠かせないのである。

しかし、一体どれだけの企業がデータを有効に活用しているであろうか。GIGO（Garbage In Garbage Out：ゴミを入れてもゴミがでてくるだけ）という慣用句がある。「データ」は目的に沿って収集することで、価値ある「情報」となるということである。しかし、実際には、手段が目的になることも少なくない。特に大企業では、データの収集・蓄積に多くの関係者が従事しているが、「使わないと思う」というデータでも平気で収集・蓄積するように指示がされることがある。「念のため」という決まり文句で。

「使わない（使えない）」データは、企業にとって無用であるばかりでなく、害悪であるとさえいえる。データストレージのコストは逓減しているとはいえ、その保有には余計なコストがかかる。また、セキュリティの観点からみると、不毛な情報を抱えることは管理を煩雑にするとともに、情報漏えいリスクを著しく高めることになる。

今後ますます企業には、目的的にデータを収集すること、そして組織内のデータ活用のリテラシーを高めることが要求されるであろう。別の言い方をすると、さまざまなデータを整理・統合できるシステムと、そこから知識を発見して活用できる人材を有する企業は、市場で競争優位を築くことができ、それができない企業・組織は、市場から退出を迫られるということである。

結論として、やはり今後の企業経営においてデータの保有は必要不可欠であると言える。しかし、ただデータを保有するだけでは、何の価値も生み出さない。データ量が爆発的に増えていくビジネス環境において、企業が勝ち残るためには、「蓄積したデータ」を「価値ある情報」に変換することが肝要である。また、その情報を活用して業績の向上に結びつけるためのシステム・人材や組織のナレッジを育むことも必要である。

今後、企業が真の意味でデータを活用するためには、社内に点在するデータを集めた統合的な情報システムの構築とそれらを活用できる有能な人材の育成・登用、そして何よりも経営者の情報戦略に対する深い洞察と高い意識が必要不可欠であろう。

以上